

令和 2 年 5 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20933

研究課題名（和文）教職員向け休・復学者支援マニュアル作成のための研究

研究課題名（英文）A study to create a leaflet for students taking leave of absence and related people

研究代表者

中岡 千幸（NAKAOKA, CHIYUKI）

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：30711882

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：平成28年度から科研費の支援を受けて、『教職員向け休・復学者支援マニュアルの作成のための研究』を開始した。科研費の最終年度（令和元年年度）には、成果物として、休学を考えている学生、または学生から休学を相談された関係者（ご家族、クラス担任、アドバイザー、指導教員など）向けに、「学生・関係者向けリーフレット（休学を考えているみなさまへ）」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

休学には、留学やその他の自己研鑽のため、本人が望んで意図的に、計画的になされる場合もあるが、「研究が思うように進まない」、「心身の不調のため、頑張りたくても頑張れない」といった理由から、不本意ながらそのようにせざるおえない場合がある。

そのため、本研究で「学生・関係者向けリーフレット（休学を考えているみなさまへ）」を作成したことで、本人が休学をするか（周りが休学をさせるか）の判断を行う上で必要な情報提供がまとめてされ、少しでも安心して休学生活に入れるような効果が期待される。

研究成果の概要（英文）：Since 2016, with the support of KAKENHI, I have started a study to create a leaflet for students taking leave of absence, or for their related people (family, class teacher, advisor, academic advisor, etc.). In 2019, the final year of the KAKENHI, I created a leaflet for students who are considering taking leave of absence, or for those who are consulted about taking time off from the student.

研究分野：学生相談

キーワード：休学者支援 復学者支援 教職員向けの対応マニュアル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19, F-19-1, Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1) 休・復学者支援の必要性

青年期は、急速な心身の変化を受け止めたり、親から心理的に離れて仲間との関係を作ったり、社会に参加していくことが求められるため、様々な心理的問題や精神障害（例えば、不安障害や統合失調症など）が好発する時期である(Kessler et al., 2007)。内田(2014)によると、平成23年度1年間の休学者数は10,676名(2.72%)、退学者数は5,178名(1.32%)であり、休学理由・退学理由ともに、消極的理由が多かった(休学が35.8%、退学が52.1%)。休学には、留学やその他の自己研鑽のため、本人が望んで、意図的に計画的になされる場合だけではなく、「研究が思うように進まない」、「授業が難しくついていけない」、「学業意欲を失った」、「心身の不調」といった理由から、本意ながらそのようにせざるを得ない場合があるということである。また、内田(2014)によると、自殺既遂学生67名のうち、休学歴がある事例は5名(9.0%)、留年歴があるのは20名と、休学・留年生は自殺等のリスクが高い群として、注意する必要がある。しかし、援助が必要であっても、保健管理センター等の相談機関を利用しない学生が多い(Kadushin, 1969)。内田(2014)によると、自殺既遂学生67名のうち、存命中に学生相談機関が関与した事例は5名(7.5%)であった。一方、学生相談機関が自殺問題を抱えた学生を早期発見し早期介入できるならば、その多くが無事に学業復帰や卒業を果たせる(兒玉他, 1998)。

2) 休・復学者支援の実態

『復学の会』等を開いて、休学者に学内での居場所を提供したり、復学に向けての準備を手伝ったりする等、休・復学者支援に力を入れている大学もある(篠崎他, 2015)。しかし、全学的な対応が取られている大学は少ない。大学における休・復学者に対する支援について調査を行った中川他(2015)によると、回答校91校のうち、休・復学者に対して何らかの関わりがあると回答したのは51校(56%)であった。また、杉江他(2012)が行った休学等に対する支援状況の実態調査によると、休学中や復学後の支援が希薄な点が明らかになっている。例えば、休学前の対応では、クラス担任や指導教員を中心に本人の相談にのっており、教育組織での対応協議や保護者や保健管理センターとの連携がみられるのに対し、休学中や復学時には、支援が減り、連携もほとんど見られなくなってしまった。

3) 本研究の着想経緯

精神科通院学生の学業転帰(卒業・退学)とそれに関わる要因について検討した石井他(2014)によると、退学群は、卒業群と比較して、大学教員との連携が少ないことが明らかとなった。つまり、休・復学者支援について、専門家だけでなく、指導教員や事務担当職員も含めた全学的な取り組みが必要だと考えられる。文部科学省高等教育局(2000)の「大学における学生生活の充実方針について(報告)―学生の立場に立った大学づくりを目指して」(以下、廣中レポート)は、学生相談・学生支援の機能を大学教育の一環として位置づけ、大学全体で学生支援に取り組む必要性を述べている。特に大学教員は、日頃の学生の出欠状況や授業やゼミ参加時の様子、個人的な相談等から学生の問題を最初に気づくことが期待されている。しかし、学生への関わりや援助方法について戸惑いや苦勞を感じている教員は少なくない(成瀬他, 2003)。休学時に一時的に学生の相談にのることがあっても、その後どう働きかけて良いか分からず、無理難題を出したり、逆に遠慮しすぎたりと対応に困っている教員も少なくない(福田, 2004)。そのため、教職員に対して、気軽に学生の相談に来室するよう呼びかけるといった教職員コンサルテーションのすすめだけでなく、教職員向けの『休・復学者支援マニュアル』を作成し、休・復学者の対応について具体的な提案を行う必要がある。

2. 研究の目的

教職員向けの『休・復学者マニュアル』を作成するために以下の研究を行う。

1) 研究1: 休・復学者の実態調査

研究1では、研究代表者の所属大学において、学生相談所利用者を対象として、休学生の状況を調査し、学生相談から見た休学生の現状と課題を検討することを目的とした。

2) 研究2: 休・復学者の支援ニーズや有効な支援方法の探索的検討

研究2では、休・復学者の支援ニーズや有効な支援方法について探索的に検討することを目的とした。

研究2-2では、筆者が実践した休・復学者支援について事例研究を行った。

3) 研究3: 教職員向けの『休・復学者マニュアル』の作成

研究3では、研究1,2で明らかになったことを踏まえてリーフレットを作成することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 研究1:

研究代表者の所属大学の学生相談室に来談した学生のうち、休学経験「あり」の学生の相談事例や休学「予定」の学生の相談事例を対象として、以下の項目について、調査・分析を行った。
①性別、②所属先・研究科、③学年、④初回来談月、⑤来談経路、⑥留年の有無、⑦相談内容、⑧連携の有無及び連携先。

2) 研究2:

研究2-1では、申請者の所属大学において、実際に学生の支援に関わっている教職員を対象に、

半構造化面接を実施し、①これまで支援した休・復学者の休学理由、②休・復学者に対して行った具体的な支援内容、③どのような支援や関わり方が上手くいったか、④どのような支援や関わりに戸惑いや難しさを感じたかという事を尋ね、有効な休・復学者支援について探索的に検討した。

研究 2-2 では、筆者が実践した休・復学者支援について事例研究を行った。

3) 研究 3 では、研究 1,2 で明らかになったことを踏まえてリーフレットを作成した。記載内容については、研究代表者の所属大学の学生相談所相談員の確認を取りながら進めた。

4. 研究成果

1) 低学年と高学年の休学の契機が異なることが明らかになった

休学理由としては、特定の必修科目での躓き(授業が難しくついていけない)、レポート(特に考察)が書けない、卒論、修論、博論が書けない等の修学上の問題、進路模索等進路に関する問題、部活・サークル内や、研究室での人間関係が上手くいかない等の対人関係上の問題、やる気が出ない等の精神的問題等、多義にわたる。ただ、休学生の学年としては学部 2 年生や学部 4 年生が多い。低学年の場合、入学した大学への適応を巡る問題(例えば、大学/学部/学科への不本意入学、単位取得が進まない、成績不良など)が休学の契機になりやすいが、高学年になると、大学から社会への移行を巡る問題(例えば、就職活動の躓き、社会に出ていく怖さ、進路の迷い、卒業研究の躓きなど)が休学の契機になりやすい。このことから、学生支援としては、入学した大学への適応を促すだけでは不十分であり、安心して社会に出て行けるように支援していくことが望まれる。

2) 関係部署との連携の重要性を示唆

休学生の約半数が留年を経験している。そのため、学生相談所に持ち込まれる主訴としては、単位取得や就職活動に伴う心理的不安や苦痛が多い。そこで、休学者への支援には修学支援や就職支援が欠かせず、関連部局と連携を図りながら支援していくことが重要である。研究代表者の所属大学の学生相談所は、学部・研究科の教職員と積極的に連絡を取り、半数以上が関係部署(保健管理センター、キャリア支援センター、学習支援センターなど)と積極的に連携していること等が明らかになった。

3) ホームページ活用の有効性を示唆

来談経路で最も多いのはホームページであったことから、ホームページ上に、「休学とは?」、「休学することのメリット・デメリットは?」、「どういう手続きが必要?」といったように、休学に関する情報を掲載したり、学生相談所の来所を促すような情報を掲載することは有益だと考えられる。

4) 医療機関に繋げることの重要性を示唆

休学を考えている、あるいは休学中の学生は、精神的な問題(やる気の低迷や睡眠障害など)を抱えていることが多いため、必要に応じて、学内外の医療機関に繋げ、関係者(指導教員や家族など)の理解を得ながら、協力して対応していくことが有益である。精神的問題については、休学をして一時的に学校のことから離れて適切な対応を取ると、心身ともに回復するケースが多い。

5) 有効な支援が明らかになった

休・復学者支援で大事なポイントは、①休学者が安心して休めるように環境調整を行う事(例えば、学生本人の納得を得る、保護者など関係者の理解を得る、医療が必要な場合は医療に繋げるなど)、②休学者が何故休学に至ったのか、何に躓いたのか、これから先どうしていきたいか(卒業を目指すのか、別の進路を考えるのか)、自己理解を深める手伝いをする事(例えば、困った時に周囲に相談できず、自分 1 人で何とかしようとしていたなど)、その上で、③休学中、あるいは復学後(そのまた将来に至るまで)に以前と同じ状況にならないようどう過ごせば良いかを一緒に検討し、④復学後も、引き続き学生の成長を見守ることである。特に、前者の修学上の問題は、授業担当教員や研究室の指導教員との連携は欠かせないものである。

6) 教職員がどのような点で戸惑っているか明らかになった

学生や保護者から語られた内容から学生が抱えている問題が明らかになり対応が可能になることがある一方で、語られた内容からでは何が問題で、何が解決すれば学業復帰できるか分からないことがしばしばある。また、学生が抱えている問題やその解決方法は明確だが、解決策をいくつか提案しても学生が乗ってこない(動きだせない)ことがある。教職員が支援や関わりに戸惑いを感じるのは、教職員としてどのような支援を行えばよいか分からない(自分のこれまでの支援方法では上手くいかない)場合である。一方で、教職員がこれまで行ってきた支援の中でも、上手くいった事例では、教職員が学生の自宅アパート、実家まで来訪したり、電話、メール、手紙などを通して、学生の脅威にならない程度に心配しているという事を伝えており、動けない学生を無理やりにでも動かそうとするのではなく、学生が動き出すまで辛抱強く待っていた。また、動き始めたら間髪入れずどっさりと ToDo を与えたりするのではなく、学生が取り組めそうな所から徐々に進めていこうと、慣らし運転をしていた。

7) 「学生・関係者向けリーフレット(休学を考えているみなさまへ)」を作成

休学を考えている学生，または学生から休学を相談された関係者（ご家族，クラス担任，アドバイザー，指導教員など）向けに，「学生・関係者向けリーフレット（休学を考えているみなさまへ）」を作成した。リーフレットに記載した内容は，①休学とは？，②休学のルールと休学できる年数，③休学するメリットとデメリット，④休学の手続き，⑤休学を考えている学生，休学中の学生が陥りやすい行動や思考パターン，⑥休学した先輩の体験談（例），⑦復学に向けて（休学中の過ごし方），休学を考えている学生の関係者の方へ：本人と接する上でのポイントであった。記載内容は，研究 1,2 で明らかになった以下の点を特に反映させた。

本研究において，「学生・関係者向けリーフレット（休学を考えているみなさまへ）」を作成したことで，①本人が休学をするか（周りが休学をさせるか）の判断を行う上で必要な情報提供がまとめられ，②休学を迷っている学生が，本リーフレットを手に取り，少しでも安心して休学生活に入ることが出来，③学生から休学を相談された関係者の一助になっているという点で一定の成果があるだろう。実際，作成されたパンフレットは既に学生に配布され，学生からは，これを読んで「悩んでいるのが自分だけでないことが分かって安心した」など，ポジティブなフィードバックを貰っている。また，教職員からも，休学するか悩んでいる学生や休学を勧めたい学生に配布したいということで，数部欲しいという声を貰っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 中岡千幸、中島正雄、長友周悟、小島奈々恵、松川春樹、佐藤静香、佐々木真理、吉武清實、池田忠義 | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 東北大学における休学生の現状 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要第3号 | 6. 最初と最後の頁 印刷中 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 中岡千幸・小島奈々恵 |
| 2. 発表標題 大学における休学者・復学者を考える：休学者の相談事例の特徴 |
| 3. 学会等名 第57回全国大学保健管理研究集会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-----------------------------|
| 1. 発表者名 小島奈々恵・中岡千幸 |
| 2. 発表標題 大学生が悩む対人関係 |
| 3. 学会等名 第57回全国大学保健管理研究集会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|